

三好達治全集

7

三好

三好達治全集第七卷

昭和四十年六月三十日發行

著者 三好達治

發行者 古田晁

發行所

東京都千代田區神田小川町二ノ八
筑摩書房

電話東京〇七六五一(代表)
振替東京四一一二三

印刷 株式會社 精興社
製本 株式會社 鈴木製本所

© T. Miyoshi

三好達治全集第七卷目次

諷詠十二月

小序	九
一月	一〇
二月	三
三月	五
四月	六
五月	八
六月	壺
七月	一〇
八月	一三
九月	一八
十月	二三
十一月	二四

十二月……………二五四

諷詠十二月補遺

七月……………二六六

八月……………二七五

卓上の花

歌集『寒行』を読む……………二八五

唐詩の一面……………二〇四

詩歌集『紫』を読む……………二二九

二つの詩集に就て……………二四〇

『二十年の歌』……………二六五

ヨネ・ノグチ……………二九〇

『樹蔭の椅子』他……………三〇五

『雪明りの路』……………三二〇

河上肇さんの詩歌	三七
詩壇圏外の詩	三五
十春詞の穠縛	三六
漢詩に於ける作者の位置の一つの場合	三八
あながき	三九
あながき (舊版)	三九
新唐詩選	三七
漂泊詩人金笠に就て	四六
古典に就て	
芭蕉の書簡	五九
萬葉の戀歌に就て	五四
春 曉	五三

古典に就て.....	五三六
燈下言.....	五四〇
正午の夢.....	五四六
あてずつぼう.....	五五〇
思ひつくまま.....	五五七
惜 春.....	五六三
解 題.....	五六七

諷詠十二月

小 序

この書『諷詠十二月』はまことは雑然たる書である。著者は本邦の詩歌今昔の諷詠をまづ十二ヶ月の月並に分つて、各月一章ごとに風尚説話解説を試みつつ、一わたりわが國上下各代各様の詠懷詩心の間をさまよひ、その著者の如き今日現在の一常識人にとつての文學的詩的手ざりは舌ざりは輕重香味を、極めて常識的に檢分し値ぶみし理解し納得しようと試みたものである。試みが大袈裟だけに随分と粗忽な點も多からうが、それらの點は後日機を得て補修を加へる時であらう。章を十二に分ち各月のために一章をあてた本書の組立は、かりそめに段落を設けて説話の便を計らんとした思ひつきで、必ずしも市井の歳事記に倣つて井然たる花鳥風月曆を編まんと欲したものではない。故に話頭の自ら波及するところ、時に陽候節物の相交つて錯綜するのは多く意を用ひて之を忌避せんとまでも心掛けなかつた。寧ろ各章毎に題意の存するところを初學の讀者のために瞭然と説かんと欲するに急であつて、餘事はすべて二の次の問題として概ね輕く視る態度に終始したものである。唯今も一言した如く、この書は詩歌の理解に熱心な、——或は熱心ならんと欲せらるる、比較的年少の初學の讀者を聽者として、著者の素懷を假りに題を設けて説かんと企てたもので、世の識者にむかつてかくの如き平凡の見を賣りひろめんとするの意は毛頭ない。由來詩歌は人各々自ら工夫し識得すべき心内自證のもの、ただ初學の年少者にとつてのみは、このやうな書もまた應分の役目を果しうるであらうか。

三 好 達 治

一月

箴

鑾^ノ牙^ノ米^ノ簾^ノ 聲^ノ々^ノ脆^ノ 龍^ノ領^ノ玉^ノ投^ノ 顙^ノ々^ノ寒^ノ

菅 丞相

うま酒のうた

賀茂眞淵

美^ミらに喫^キらふるがねや、一杯^{ヒトツキ}二杯^{ニツキ}。樂^{ラク}悦^{エツ}に掌^{タナ}底^{ソコ}拍^{ハク}舉^{キョウ}ぐるがねや、三杯^{ミツキ}四杯^{ヨツキ}。
言^{コト}直^ナし心^{ココロ}直^ナしもよ、五杯^{イツキ}六杯^{ムツキ}。天^{アマ}足^{タラシ}らし國^{クニ}足^{タラシ}らすもよ、七杯^{ナナツキ}八杯^{ヤツキ}。

「がね」といふ語は、『言海』によると、「之^ガ根^ネの義、云云せむ、それが根本といふ意」と解かれてゐる。ここではさう解いてみて、直ちに歌意は明らかとなるであらう。即ち起句は、一杯二杯は、ただうまらに飲みほすばかり、といふほどの意を、面白くいひなしたものである。以下一首の歌意は、讀者に於て靜かに判讀玩味していただきたい。七くどくたどたどしい解説を加へ註釋を試みてみたところで、原作の語氣に籠つた肝腎の生命、言靈のさきはふ急所のところは、到底原作自らを他にしては表現できないに違ひないから。

原作は簡潔を生命として、ただただ力強く傍眼もふらず一直線に歌ひあげてゐるのである。前置きも曲折も、駆け引も粉飾もなく、ただひたすらに實感實情の急所のみを、最も單純に最も明瞭に

歌ひあげてゐるのみである。他には顧みるところがない。さうしてその單純明瞭そのものの間に、津々として汲めども盡きない妙趣の感ぜられるのが、つまりはこの作者眞淵翁の、國學の上で唱道された所謂古道古意の眞髓にもやがては相通ずる、生々潑刺流動して滯るところのない、素樸心の不可思議作用ともいふべきものであらう。

さうして所詮は詩歌の面白さなどといふものも、それは必ずしも常に素樸な世界にのみ局限されるものではないが、例へばこのやうな種類の精神の躍動、生命感の手應へ、その程度や多寡や品質に關聯してゐるものであつて、その他の枝葉末節に關聯した何ものでもないことを、この書物の最初に於て、筆者はまづ讀者諸君に豫告しておきたい。さうして事實に就て、追々とその一層詳細な理解や納得にむかつて進んでゆかうとするのが、一定の目的地點をもたないこの書物の唯一の航海目標である。

酒のうたに因んで、次には「古事記」中巻に見える酒ほがひのうたを擧げてみよう。

酒樂のうた

この御酒はわが御酒ならず
酒の神常世に坐す
石立たす少名御神の
神壽ぎ壽ぎ狂ほし

豐壽とよひさき壽しうき廻もとほし

獻まことり來こし御酒みさけぞ

涸かず食たせ ささ

○

この御酒みさけを釀かみけむ人は

その鼓つづみ白しろに立てて

歌うたひつつ釀かみけれかも

舞まひつつ釀かみけれかも

この御酒みさけの御酒みさけの

あやに轉くわん樂らくし ささ

前者は神功皇后の御作、後者は武内宿禰の作となつてゐる。けれども神代上古のこれらの歌詠は、たとへこのやうに作者の名の明らかに存するものも、これを後世の文學的作品を見るやうに、個性をもつて獨立した一個の人格を透した上の制作品と見なすよりは、寧ろある社會集團部族の、多數者の合言葉としての、慣習的合意的の生産物と見なす方が、その受けとり方としても遙かに妥當であり、また多く暗示性にも富んで眺められるに違ひない。

さうしてこの酒樂さけがくのうたなども、作者の存在はしばらく度外にして、さういふ風の集團の歌として、見なすべきであらうと思はれる。

それがそもそも合唱歌として存在してゐる、といふ點は假りに問はないことにしても。

さて先の、例の古學の所謂古道古意に立脚し終始した眞人眞淵翁の作歌を、ここでもう一度顧みてみると、それをもとより一寸先にも一言したやうに、簡明素樸を極めたものではあるが、しかしながら神代上古の歌詠の類にそれをとつて比較して見ると、その簡明素樸は、所謂復古思想の、古へにかへらんと憧憬し意志した近世人の、いはばそれは簡明素樸を旨としたところの簡樸であつて、そこに作者の態度なり主張なりの、思想的個性的意識の影のさしてゐるのは、まことに理の當然のことであつて、先に挙げたただ一首の實例に就て見ても、まづこれだけのことは、明らかに指摘できるかと思はれるのである。

このやうに眞淵の作に較べて見ると、「古事記」の酒樂のうたは、何らの意志も選擇も加へずして自らに簡明素樸な時代のものであつて、まことにそれは簡樸そのものの見本のやうな歌詠である。凡そ詩歌の類もこの頃の時代まで遡つて見ると、先にも一言したやうに、そこにはもはや個人的な作者の影は殆んど全く稀薄となり、或は全く絶無となつて、それをしもやはり文學と呼び詩歌と呼ぶ同じ一つの名稱は用ひるとしても、所謂我々の今日普通に文學と呼び詩歌と呼んでゐるものとは、殆んど隔絶した、別天地のものに屬するのは、凡そ誰人の眼にも一瞥して明らかなのところであらうと思はれる。

けれどもその没個性の、没意識の、花咲ひ鳥囀ると同じく自然な天真な發聲、いはば部族生活集團生活の合言葉としての詩歌、——詩歌とよりは寧ろ歌謠とも民謠とも稱するの殆んど適切な詩歌、記紀の詩歌すべてが即ちそれである。その天真流露として極めて利那的な樂天的な、聲調の優

雅な氣分の快活な、さつぱりとして男性的な合唱歌からして、我々の今日の詩歌も文學もすべて誕生し成長し來つたのである。我々がその後如何に成長し發育し、複雜化し深化し、また醇化し、苦惱し、反省し、沈思し、變貌し、廢類し、淺薄化し、また同生し、まことに如何ばかり消長起伏をくりかへしつみ重ねて來たことだらう、それはさながら、上下二千六百年に亙る、我々の歴史國民生活史そのものと稱してもいささかも憚りはあるまい。

さてここでは、その我々の懐かしい故郷搖籃の出生地、その目出度い發祥の遠い昔の合唱歌、その黎明の鄙歌を幾つか掲げてみるとしよう。記紀の長短歌は今姑く措いて、ここには特に神樂歌催馬樂の類を若干選び出してみよう。

階香鳥しながとり

しながとりや猪名いのなの水門みなとに

あいそ

入る船の

梶かぢよくまかせふね傾かたむくな

船傾ふねかたむくな

若草のや妹も載せたり

あいそ

我も乗りたりや

船傾くな

船傾くな

しながとりは即ち息長鳥即ち鴟の鳥である。鴟は常に雌雄相伴つてゐるその習性から、やがてゐる字の枕詞とされてゐる。

他は殆んど解するにも及ぶまい。梶は櫓櫓の類であらう、上世のことであるから、もとより舵ではあるまい。

總角

總角を早稲田に遣りてや

其を思ふと其を思ふと

其を思ふと其を思ふと其を思ふと

其を思ふと何もせずしてや